

## 6)海辺の営みに見る歴史的風致

### 海とのつながり

紀伊水道に臨む湯浅湾に面する湯浅町は、豊富な海の幸に恵まれ漁業が盛んである。栖原と田にはそれぞれ漁港があり、大字湯浅では湯浅広港の港湾の一部を漁港として利用している。鯛の稚魚であるシラスや、タイ、イカ、タチウオ、アジ、サバといった近海の魚介類が獲れ、中でもシラスは和歌山県で最も多い漁獲量を誇り、水揚げされたばかりの新鮮なシラスを使った加工業も営まれている。また、自然が豊かで風光明媚な栖原と田の海岸は、西有田県立自然公園に指定されている。

周囲を山に囲まれ、海に開けた地理的条件である湯浅は、古来より海との強い繋がりを持ってきた。『万葉集』の「由良の崎潮ひにけらし白神の磯の浦廻を…」の歌にもみえるように、湯浅湾には古代から船が行き交う姿があった。この白神の磯とは、栖原の<sup>せおいじ</sup>施無良寺が建つ白上(白神)山の麓に広がる磯のことで、嘉永4年(1851)の『紀伊国名所図会』にも描かれている。

平安時代末期から隆盛していた湯浅一族はまた、優れた造船・操船技術を有する水軍を配備し、海上にもその支配権を広げていたとされる。その技術は、やがて湯浅の人々の海での活躍へと繋がっていく。彼らは、醤油をはじめとした産品の大阪や江戸方面への移送、房総方面や五島列島近辺への漁業者の進出と、全国各地の海に繰り出していった。

### 湯浅町の漁民の活躍

近世初頭より、鯛が農作物に対する良質な肥料として価値を見出される。慶長年間(1596~1615)の頃からは、畿内では綿作・菜種が、それより遅れて紀州では柑橘栽培が、阿波(徳島県)では染物の原料である藍作が、商業的農業として本格的に栽培されるようになると、それまでの草肥・糞尿が主とした<sup>せひ</sup>施肥では到底需要が賄いきれなくなってきた。そこで、鯛を干して肥料とする<sup>ほしか</sup>干鯛が、良質で、かつ豊富な肥料として需要が急増し、紀州の漁民は鯛を求めて出漁した。湯浅沿岸は漁業区域が狭小であるため、遠く房総半島や五島列島に向けて出漁していったので、地元には記録が乏しいところではあるが、1660年頃から幕末に至る<sup>かこまい</sup>加子米(紀州藩が漁獲量に応じて港ごとに課した課税)の石高は、湯浅が270石で紀州一であったことから、湯浅の漁民の活躍



醤油蔵が見える湯浅広港の漁船係留施設



白神磯眺望の図



顯國神社手水鉢

をうかがい知ることができる。

房総半島は、湯浅をはじめとした紀州漁民との関わりが深く、その交流の痕跡が多く残っている。

湯浅の顯國神社の鳥居の側にある手水鉢には、「産子中、在関東上総国・御宿浦・天王台・六軒町・岩和田・岩船浦」との刻がある。房総半島の御宿との繋がりを示す貴重な資産である。

房総半島の東端、銚子の外川浦は、明暦2年（1656）に広村の崎山次郎右衛門に率いられた、主に広・湯浅の漁民が拠点を置き、町や港を築いたことが知られている。『湯浅町誌』によると、外川浦の宝満寺には、「宝永2年（1705）六月日紀州有田郡湯浅瓦屋四郎兵衛」と刻まれた古瓦が伝わるという、また、宝暦4年（1754）の『宗門改印形帳』には湯浅出身の人名が多く残されている、と記載されている。

房総半島南端の館山市にある船越鉦切神社に伝わる鰐口（館山市指定有形文化財）には、紀州栖原村の住人である「垣内太郎兵衛、前田六右衛門、芦内佐平次」らが元禄10年（1697）に奉納したということが刻まれていて、この当時における交流を伝えている。



船越鉦切神社鰐口

他にも、房総半島の漁民の使う方言には、湯浅付近の方言と似た言葉やアクセントがあるという指摘が『九十九里町誌』でなされる等、「マカセ」と呼ばれた紀州漁民との交流は様々な形で残されている。マカセは、一説には網を引く「ヨイトコマカセ」という掛け声に由来するとも言われ、マカセ網と呼ばれる罾網は強靱なものであった。この網の製造技術は、醤油の諸味を搾る袋を編む技術を導入したものといわれ、湯浅の製網業は一時、湯浅の主要産業のひとつであった。

房総からさらに北方へと漁場開拓を進めた者もいる。栖原村の栖原家初代角兵衛は、元和5年（1619）に栖原に移住して漁業をはじめ、房総方面で漁場開拓を行った。2代目以降（栖原家は代々角兵衛と名乗った）は、江戸に出て漁業のかたわら薪炭や材木問屋を経営し、さらには蝦夷地の開拓を行って、漁場経営や、蝦夷地での産物の取引を行って、北海道経済界の先駆的役割を果たした。栖原角兵衛屋敷は、寛政9年（1797）に建てられた主屋と土塀、土蔵が現存し、国の登録有形文化財となっている。内部の意匠からは、往時の財力が偲ばれる。



栖原角兵衛屋敷

このように、湯浅近辺の漁民たちは、優れた造船・操船技術と、製網技術をもって、広く全国で活躍したのである。

## 海の整備

湯浅では、寛文元年（1661）、狭小になってきた市街地を拡大すべく、濱町の西側に新屋敷が拓かれた。その様子は、『在田郡湯浅浜丑ノ新屋敷絵図』に詳細に描かれている。



在田郡湯浅浜丑ノ新屋敷絵図

南北の通りから西側の海へ向かう小路は、それまでの湯浅の小路が1.8メートル程度、狭いものでは0.9メートルに満たないほど狭いのに対し、新屋敷では3メートル前後の幅員で作られている。これは、最初から海に出ることの利便性を意識した町割であることが明らかで、現在もその当時の町割が維持されている。中心付近に描かれている「口前屋敷」は、海上や河川を利用して移出入される物品に対する口前（張口銀）と呼ばれる課税を徴収する屋敷であり、湯浅における海上輸送を監視していた。また、絵図の右端、つまり北端には、「えびす屋敷」との記載があるが、これは現在の北恵比須神社である。



弁財天堀 石積みの中波止

湯浅市街地の南を流れる広川では、慶長6年（1601）に深専寺第8世住職である有伝上人によって、流路が変更された。今より南を流れ、河口部に広漠たる河原が広がっていた広川を、高城山の西隣にあった塹壕を利用して湯浅寄りに移し、あわせて河口北岸に堀割を造り、石堤を築いた。石堤には、別所の弁天山から水神として弁財天神社を勧請して祭祀した。今に伝わる弁財天堀である。堀割面積は大きくないが、近海を帆走する和船にとっては重要な内港として機能した。

弁財天堀は、現在も漁船の係留地として使用されており、一部改修はされているものの、慶長6年（1601）の石積みである中波止が残っている。また、弁財天神社では、毎年7月7日に「ぎおんさん」と呼ばれる祭礼が行われる。当社は明治40年（1907）に顯國神社に合祀され、昭和戦前から戦後しばらくの間、当地に社殿が無かった時期があった。その期間は、祭礼の当日に顯國神社から神輿を運んできて社殿の代わりにしたという。祭礼は七夕の日に行われることから、願い事を書いた短冊をつるした笹を納めにくる多くの参拝者で賑わう。



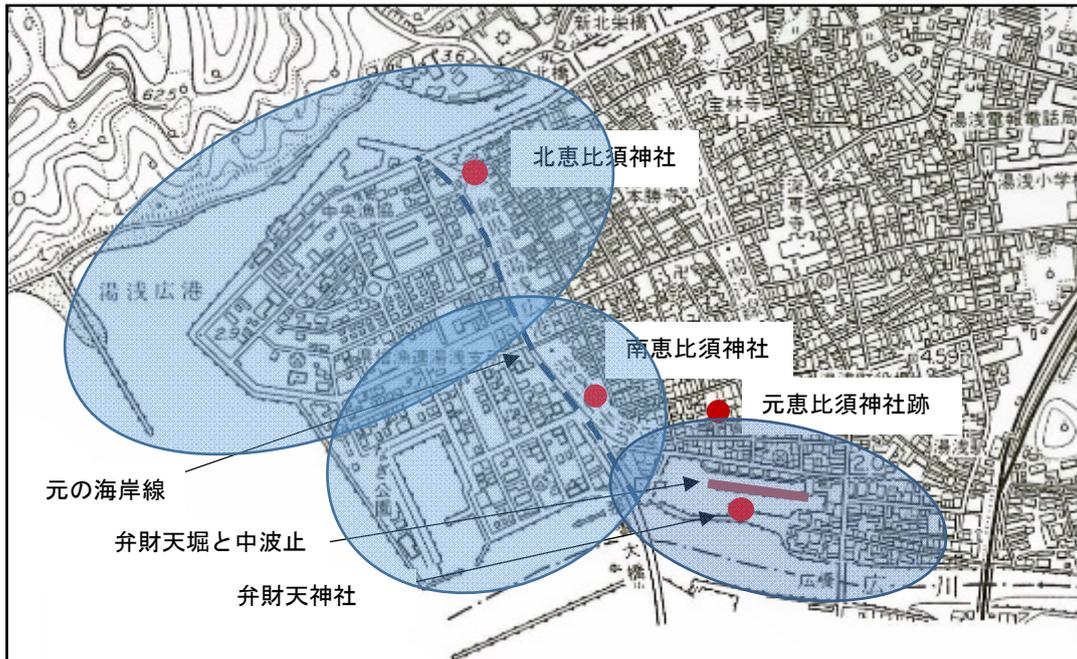
弁財天神社の祭礼の様子

### 恵比須神社に伝わる漁民の神事

本町における神社の祭礼では懸け鯛が供えられ、神のご利益を与えられる最たるものとして氏子たちが鯛投げの神事でそれを奪い合う。田の國津神社の由来では、釣りに来ていた大己貴命<sup>おおなむちのみこと</sup>が当地に祀られたとあるなど、町民の信仰には海や漁業の伝統が深い関わりを持っているが、さらに強い結びつきのあるものに、えびす神がある。

えびす神は、古くから漁民の信仰を集めた神で、各地の漁業地で祀られている。湯浅町内には、旧市街地西端の新屋敷の南北と、田、栖原の4箇所<sup>ことしろぬしのみこと えびすのみこと おおわたつみのみこと</sup>にあり、事代主命、蛭子命、大綿積命などを祭神とする。それぞれ、現在に至るまで地元の漁師を中心に崇敬され、漁の無事や大漁を祈念する祭事が執り行われている。なお、新屋敷の南北にある恵比須神社は、元は中町に祀られていた元<sup>もと</sup>恵比須神社から勧請されたもので、元恵比須神社の社殿の跡地には石積み<sup>いしづみ</sup>が今も残っている。

旧市街地の新屋敷の北端にある北<sup>きた</sup>恵比須神社は、寛文元年（1661）の新屋敷開発の際に、漁民たちが相談して当地に勧請したといわれている。現在は埋め立てにより海岸線から離れているが、前述の『在田郡湯浅浜丑ノ新屋敷絵図』にもその位置が記されており、当初は浜に面していたことがわかる。石灯籠が文政6年（1823）の寄進であり、建築様式から見て本殿もその頃の建立であると考えられる。毎年7月22日には、漁師たち参列者がお供え物を持ち寄り、神事が執行されている。



湯浅地区の恵比須神社と弁財天神社の位置及び活動の範囲図



北恵比須神社



北恵比須神社の祭礼の様子

新屋敷の南端、北恵比須神社と対を成すような位置には、南恵比須神社があり、ここでも7月22日に神事が行われ、賑わいをみせる。詳細な由緒は不明だが、おそらく北恵比須神社と同じような時期に成立したと推測される。境内には寛保2年(1742)の手水鉢がある。社殿は平成11年(1999)に再建されたものである。

この南北の恵比須神社では、1月か2月の休漁日しおなおに潮直し神事が行われる。これは、もともと不漁続きの時に、数々の興行とともに行われた浦汐祭うらしおまつりが、毎年行われるようになったもので、南北の恵比須神社で神事を行ったあと、海水を釜で炊き上げ、海を祓い清めて安全と豊漁を祈願するものである。もとは、浜の中央で行われていたが、現在では漁港にある市場で執り行われている。



賑わう南恵比須神社の祭礼

田の恵美須神社は、國津神社くにつの境内にある。元は大綿積神社おおわたつみと称し、境内の別の場所で祀られており、明治40年(1907)に田と栖原にそれぞれ祀られていた恵美須神社と住吉神社を合祀した。その後、明治44年(1911)に許可を得て恵美須神社と改称している。社殿は、明治39年(1906)に再築した恵美須神社のものが使われていることが棟札から判る。毎年1月9日と7月22日の2回、地元の漁民が集まって神事が行われている。栖原の恵美須神社は、明治40年(1907)に田の大



田の恵美須神社の祭礼

綿積神社に合祀されたものの、まもなく地元の願いにより元の場所に還された。ここでは、1月10日と7月20日に神事が行われている。また、恵美須神社と同じく一度は合祀されて後に栖原に還された神社に、江戸時代の漁師で豪商の栖原角兵衛の私有地に祀られていた幸神社があるが、ここには江戸時代に栖原角兵衛(北村家)が寄進した石灯籠が大切に残され、水神である市杵島姫命いちきしまひめのみことを主祭神とする巖島神社が昭和11年(1936)に再建された社殿に祀られており、今も漁民から崇敬されている。

町内にあるえびす神を祀る神社での神事は、神社が勧請されたときから行われているものと推測され、昭和42年(1967)発行の湯浅町誌には漁民の旧習に関する故事として掲載されている。漁業の神様であるえびす神は、地元の漁民に篤く信仰され、毎年の神事では、多くのお供え物や参拝者が見られる。大海原に出て漁を行う人々にとって、その信仰心は、昔も今も変わらず続くものとして、良好な歴史的風致を形成している。



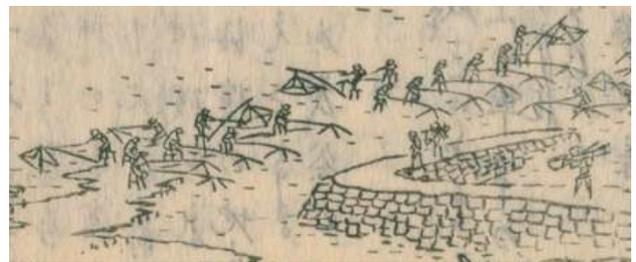
田の恵美須神社の位置と活動の範囲図



栖原の恵美須神社の位置と活動の範囲図

### 広川のシロウオ漁

湯浅における海辺の営みとして特筆すべきものとして、広川河口で行われているシロウオの四つ手網漁があげられる。シロウオは、ハゼ科の仲間で、早春になると産卵のために河川下流域に遡上してくる。その習性を利用して、毎年2月中旬から3月下旬にかけて、浅瀬に櫓を組んで四つ手網を下ろし、群れが網の上を通過する頃合で引き上げて獲るのが、この辺りでの



紀伊国名所図会 〈方の川口にて白魚を取る図〉拡大

漁の方法である。『紀伊国名所図会』には、海部郡方村（現在の海南市下津町）の河口でのシロウオ漁の様子が描かれており、広川の条にも「海口に白魚多し」との記述があることから、少なくとも江戸末期にはこの漁法によるシロウオ漁が行われていたことが推測される。なお、湯浅ではシロウオのことを、「シラウオ」あるいは「シラオ」と呼ぶのが一般的である。シラウオというキュウリウオ目シラウオ科の魚があるが、まったく別の種類である。



シロウオ

現在では、県内で、櫓を組んで漁をする漁法でのシロウオ漁が見られるのは、広川河口だけである。獲れたシロウオは、地元の料理店で吸い物やかき揚げなどに調理されて出されるほか、生きたまま二杯酢に漬けて食べる「おどり食い」が有名である。

吹き抜ける風のまだ冷たい季節、早春の陽光に照らされて白く輝く網が川面に映り、ゆっくりとしたのどかな時間が流れる。シロウオの四つ手網漁は、昔から変わることなく本町に春の訪れを告げる風物詩である。



昭和51年（1976）のシロウオ漁と現在のシロウオ漁



広川河口でシロウオ漁が行われる範囲

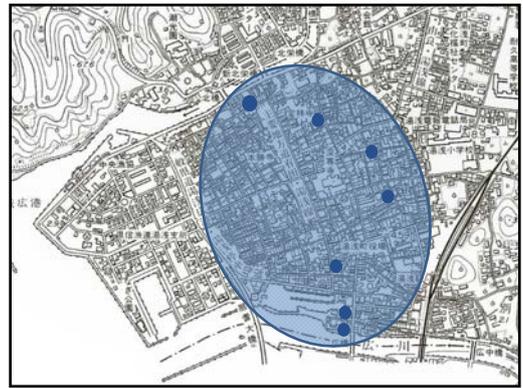
古来より港町としての側面を有してきた本町において、海での営みは、漁業をはじめ、醤油醸造の伝播や、江戸等で活躍する豪商を輩出するなど、全国各地へと繋がっていった。近代以降は、本来の沿岸漁業に回帰し、漁船の装備や漁具、漁港施設の近代化が進み、漁のスタイルも現代的になってゆく。そうした時代の流れにあっても、湯浅、栖原、田のそれぞれの「浜」と呼ばれる界限には、海を意識した町割や、大いなる海と人々を繋いできた神社があり、そして古くからの市街地には、水揚げされたばかりの新鮮な魚を扱う鮮魚店が、伝統的な町家で営まれている生活環境が現在も息づいている。



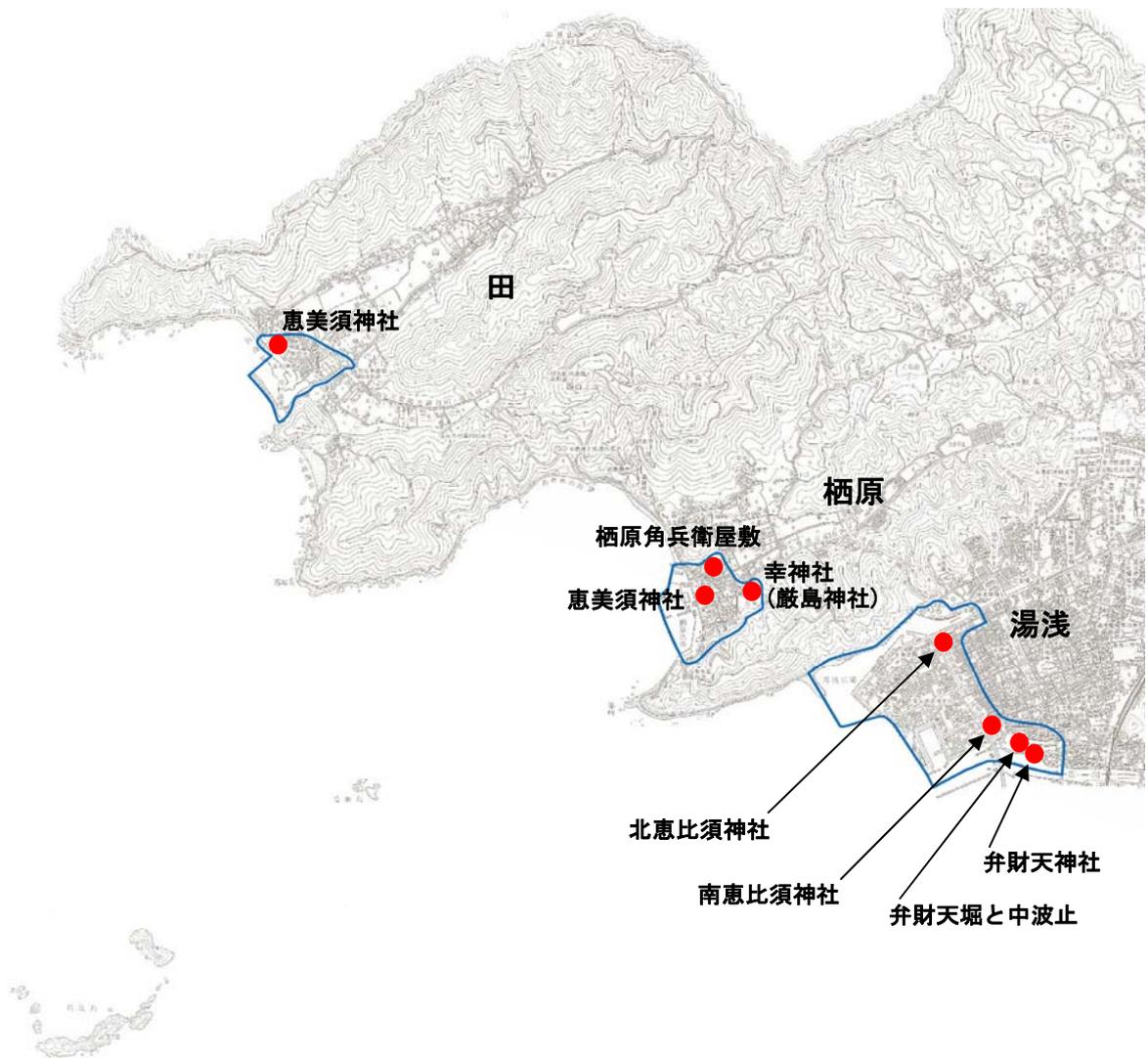
江戸期の町家で営業する鮮魚店

神話の時代、神様たちが釣りをしに来られた湯浅湾は、今も豊かな自然環境に恵まれ、田、栖原、湯浅の砂浜や海岸には、魚釣りや海水浴など海でのレジャーを楽しむ多くの人々が集まってくる。白上の山から望む湯浅湾の景観は、万葉の人々が見た景観のまま、青い海に浮かぶ刈藻島や毛無島と、船が行き交う湯浅湾と栖原の人々の生活を感じる集落という構図を現在に引き継いでいる。伝

統ある漁業を続けてきた漁師たちの海に対する畏敬の念は変わることなく、豊漁と海上安全を祈願する祭礼神事が今もなお受け継がれており、水神を祀る神事や地域固有の伝統漁法など、海辺の営みと密接な関わりを持つ信仰や伝統が、良好な自然景観とともに人々に継承されている。



古くからの市街地にある鮮魚店の分布図



海辺の営みに見る歴史的風致の範囲